

「物語を作ろう」

新しい指導を考える会

表現を工夫して書く

■「書く」ということ

書くことの指導を行う際、指導者が最も注意を払わなければならないのは、何を身につけさせるのかという、指導者自身による指導内容の焦点化である。

わたしたちは、ふだん、取材から構成、そして文章表現の仔細に至るまでのすべてを、「書く」という一言でくくってしまった指導をしてはいないだろうか。また、文章構成を中心に指導を進めてきたはずなのに、評価では叙述のよしあしを問っているようなことをしてはいないだろうか。指導者自身が指導内容を絞りきれなかったり、評価がねじれていたりしている中でさえも、子どもたちは必死に書く力を身につけようとしている。これでは、子どもたちがあまりに報われない。

そこで、本稿では、子ども一人一人に応じた指導内容の焦点化と、次の段階の学習活動を喚起する指導のあり方のヒントを提案していこうと考える。

■単元構成の方法

「物語を作ろう」(五下)は、四時間扱いの教材である。当然な

■単元構成の手順

前述の具体例を参考にしながら、本単元の構成の一般的な手順を述べる。

書く力に関係する内容を洗い出す。

「書くこと」の単元に固執することなく、書く力に関与する内容を当該学年の教科書で洗い出すことは必須の作業である。それは、それほど身構えず、表1程度の簡便な方法で十分である。また、これを他領域で、そして、当該学年以外の教科書でも行うことは、国語科の指導内容の全般をとらえることになるので、積極的に取り組んでいただきたい。

当該教材での指導内容を精選する。

まず、教材の学習のねらいである、「表現を工夫して書く」を参考にしながら、全般的な指導内容を決定する。

次に、当該単元に入る時点で、子ども一人一人に身につけてほしい書く力を、表2のようにまとめる。

表2 身につけてほしい書く力一覧

氏名	身につけてほしい書く力	資料となりうる教材の例
A男	・文を簡潔に表す ・指示語を的確に用いる	A男の例 一年「すきなもの、おしえて」 二年「楽しかったよ、二年生」 二年「黄色いバケツ」
B子	・接続語を意識的に用いる ・語彙をふくらませる	取材メモを収集する
C子	・文を簡潔に表す	五年「人とおもの」の付き合い方 新聞や身の回りにある文章類など
Z男	・効果的に構成する ・語彙をふくらませる	

がら、本教材のみを単独の「書くこと」教材として扱うには時間が少なすぎる。この四時間は、前述したように、焦点化された指導内容のみを目的として扱うことが賢明であろう。(もちろん、それは、子ども一人一人の課題に応じて設定されるべきである。)では、どのような取り組み方が有効なのだろうか。それは、周到な事前準備と継続指導の中での一通過点、もしくは小ゴールといった設定で臨むことではないかと考える。下巻の、今からでも間に合う本教材までの単元設定の一例を述べてみよう。

表1 下巻から始める単元設定

単元名・教材名	身につける事柄
一人物の考え方や生き方をとらえよう	A. 文章の構成 (現在―過去―現在)
「わらくつの中の神様」	イ. ストーリーテラーとしての登場人物の扱い
言葉の組み立て	ウ. モチーフ
二 目的に応じた伝え方を考えよう	エ. 複合語による表現
詩を味わおう	オ. 取材メモ カ. 絵コンテに合わせた原稿づくり
意見を整理しながら、目的に向かつて話し合おう	キ. 暗喩 ク. 取材メモや構成メモの分類・整理

表1からも分かるとおり、本教材の取り組みまでに、物語を書く際に必要となるさまざまな力のうち、アからクまでの八つの「身につける事柄」を準備しておくことができる。もちろん、これまでの継続があれば、それらの力をまんべんなく押さえておくことが肝要であるし、より詳細な指導が可能になる。

既習教材を資料化する

国語科の指導は、入門期の一期間を除き、繰り返しらせん状に行われるものである。したがって、身につけてほしい力が取り扱われている既習教材を想起させ、それを活用していくことはたいへん有効である。また、その際、教科書教材のみではなく、日常の言語活動全般を見渡す広範な発掘作業を行うことで、子どもの書く力のすそ野を広げていきたい。

発掘した教材は、参考文献・参考資料という意味合いで、子どもたちが、すぐに手に取ることができるようにその形態を工夫し、学習の場に準備しておく。学習の場を図書館などに移すことは、最も手っ取り早い方法ではないだろうか。そして、どの子どもにもどの資料を用いるかを先の表2に例のように書き加えていけばよい。

当然、話し合いの中の想起で済むような場合(物語のあらすじ等)は、紙のメディアの準備は不要である。

■書く力を身につけさせる学習活動例(物語文の場合)

本教材で予想される主な学習活動例を以下に述べる。

例1 構成する力

前述したような準備なしに、唐突に「書くこと」の活動に入っても、子どもたちは、何を書いていいか、まったく分からない状況に陥ってしまう。その最も大きな原因は、物語のあらすじ、つまり「物語」そのものが創造できない点である。

何もないところで、一枚の写真を見て、さあ書きましょうと言われても、つじつまの合う話を組み立てられる子どもはそう多くはないだろう。そういった際に有効な手だてが、以下の二点である。

○作品の構成を模倣する。

既習の教材等から、その構成を模倣させる。

「わらべつの中の神様」(五下)のモチーフとなるわらべつのエピソードを、教科書の写真にある桜や兄弟に置き換えてみるという活動は、比較的容易に物語を組み立てていくことを促す。そういった観点で、土台にできそうな教科書教材を表3に挙げてみる。

表3 土台となる教科書教材

写 真	教科書教材
草原の組み写真	一年「はなのみち」 一年「くじらぐも」 三年「モチモチの木」
新幹線と兄弟	四年「白いぼうし」
校庭の桜	三年「三年とうげ」
猫と少年	一年「ずつと、ずつと、大すきだよ」 二年「スーホの白い馬」
ニホンザル	一年「ためきの糸車」 三年「きつつきの商売」
カマキリ	二年「スイミー」 四年「こんぎつね」

しかし、教科書では四年から、導入単元で一人称の教材を取り上げており、これには、読書活動を通して、自他を見つめる姿勢を培う願いも込められている。

五年生の今の段階ともなると、一人称で物語を書き進めることは、案外容易な活動であると感じる子どもも少なくないはずである。子どものそうした特性を見つめてアドバイスしていきたい。

このことを意識せずに、先述したような場面「この短い物語を書く」と、それぞれで視点がバラバラになり、最終的には、登場人物の行動を客観的に追っただけで、叙述や描写の少ない、説明文的物語ができあがってしまうので注意したい。

○数量を制限する。

子どもたちの活動の際の負荷として数値目標を掲げる。

「文は何文まで」「接続語は何語まで」といったふうに、簡単な負荷を与えることで、子どもたちの思考が活発になり、試行錯誤を繰り返すうちに、表現が工夫されることになる。

分かりやすい文の組み立てといったような視点をもって参考資料に当たすることで、単に構成の模倣にとどまらず、描写や叙述に目を向けさせていくことが可能になる。

また、ともすれば個別の活動になりがちな本教材でも、「友人の二文を接続語を用いずに一文に直すには」とか、「この文で主語を省くためには」という発問を用意することで、全体で検討し、練り上げる活動を促すことも可能になる。

○絵コンテをもとに紙芝居を作る。

三枚から四枚程度(子どもの力により増減する)の絵コンテを準備し、場面ごとの短い物語を作る。

教科書の写真をもとにしてもよいし、オリジナルでもよいので簡単な絵コンテを作成する。子どもたち自身が絵コンテを作ることができればいいが、指導者が準備しても差し支えない。ただし、その場合には、創造性の育成といった面では多少効果が損なわれる可能性がある。

当然、この二つを組み合わせた活動、つまり、既習の教材を土台に、教科書の写真をモチーフに入れ替えた絵コンテ作りを取り入れれば、より効果的なものとなる。

例2 文を簡潔に書く力・接続語を適切に用いる力

物語の構成やあらすじが決まったということだけで、すらすら書き上げられるものではない。この段階で、子どもたちに見られるのは、一文が長くなる、主語や接続語を多用する等の冗長な表現である。それを防ぐ手だてを以下に二点挙げる。

○視点を意識する。
人称の問題は、物語を書くうえで避けて通ることのできないものである。

子どもたちが何気なく取り組むものには、三人称の物語が多い。発達段階からいっても、子どもたちの身近にある物語から見ても、自然なことではあると思う。

■評価に際して

「指導者が『評価者』となる際に陥りやすいのは、ひたすら文章構成を指導してきたにもかかわらず、ストーリーの奇抜さに目を奪われてしまつような過ちである。指導者が読者になる必要はないのだ、ということとは頭に入れておきたい。

指導内容と対応した評価を、あくまでもストイックに行うべきである。これまで述べてきたような観点で指導を行えば、評価の数値化も容易になり、子どもたちに分かりやすくフィードバックさせることが可能である。

■最後に

国語科の学習指導は、大味になりがちなところがあり、それがまた、指導効果を減衰させることにもつながって悪循環をきたしている。

この機会に、「話す」、「聞く」、「書く」、「読む」といった活動をミクロに分析してみるのはいかがだろうか。

書く活動については、学習指導書『小学校国語「書くこと」の指導―確かに豊かに「書く力」をつけるために』(光村図書)の「練習編」にその指導方法と学習シート、そして教科書教材の対応表を付した三十項目にわたる「書くことマトリクス」(P118)によって詳細に分析が試みられているので、ぜひ参考にされることを勧めたい。